1　平瓦製作技法からみた古代東アジア造瓦技術の流れ

山崎 信二
（奈良文化財研究所）

A　はじめに

平瓦の製作法については、1972 年の佐原真の論考「平瓦桶巻作り[1]」が最も基本的な論文であり、観察点を 39 項目あげている。古代東アジアにおける平瓦製作法の流れを概観してみると、「桶巻作り」以前の段階と以後の段階を区分することが必要であり、さらに佐原があげた項目のうち、桶が「無柄非開閉式桶」か「有柄開閉式桶」か（佐原 1972）の視点、また粘土素材が「粘土板桶巻作り」か「粘土紐桶巻作り」か（佐原 1972）の視点が重要である。

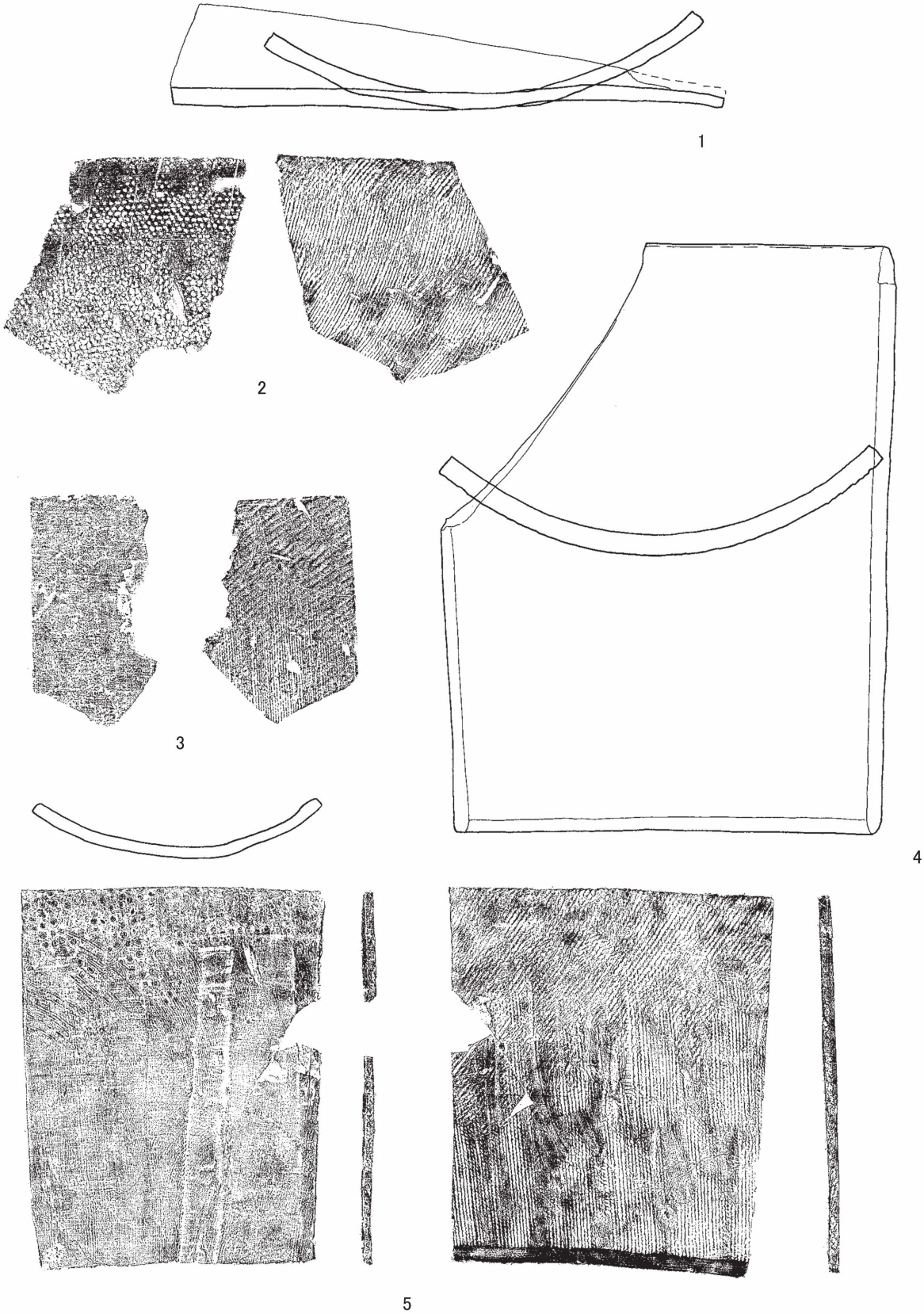
朝鮮半島の平瓦製作法について重要な指摘をした論考は、1993 年の崔兌先の「平瓦製作法の変遷に対する研究」であり[2]、彼はそこで、「模骨桶」（崔 1993）＝「有柄開閉式桶」と「円筒桶」（崔 1993）＝「無柄非開閉式桶」に分類し、三国時代の高句麗・百済地域は「模骨桶」であり、統一新羅時代以降は「円筒桶」を用いるようになること、新羅地域では初期の段階から「円筒桶」を用いていたと思われることを指摘した。

一方、佐川正敏は、中国の軒平瓦について、「粘土紐桶巻作り主体の可能性」をはやくから指摘していた[3]。

中国・朝鮮・日本の平瓦製作技法の相互関係を検討するには、「桶巻作り」以前の段階の平瓦（A 型）、円筒桶で粘土紐桶巻作り平瓦（B 型）、円筒桶で粘土板桶巻作り平瓦（C 型）、模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦（D 型）、模骨桶で粘土板桶巻作り平瓦（E 型）の５分類が最も有効であると考える。

B　「桶巻作り」以前の段階の平瓦

中国の瓦は西周初期（前 11 世紀中葉～前 10 世紀中葉）に遡るが、その製作技法は泥状盤築技法による粘土円筒を縦に４分割[4]したものである。この泥状盤築技法（A 型）から、「桶巻作り」平瓦へと変化した年代は、厳密には不明だが、櫟陽城出土の丸瓦部に布目痕を有する軒丸瓦の年代が漢王の櫟陽宮時代（前 205～200）と推定される[5]ことから考えて、桶巻作り平瓦の出現も前漢初頭に遡るものとみられる。



第1図　秦・漢の平瓦（1/6）

1～3　櫟陽城　4　皇后陵東門跡
5　中国社会科学院考古研究所　洛陽工作隊展示瓦（後漢）

C　前漢と後漢の平瓦

第１図３は、漢王の櫟陽宮時代と考えられる櫟陽城出土[6]の平瓦であり、平瓦部の凹面に模骨痕はなく、円筒桶で粘土紐の合わせ目が認められる（B 型）。第１図４は、漢杜陵陵園遺跡出土[7]の平瓦であるが、凸面は縄叩き、凹面は軽いナデ調整で布目をすり消す。凹面の状態をみると、模骨痕はないようである（B 型か C 型）。年代は、元康元年（紀元前 65 年）頃に位置づけられる。

第１図５は、中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊の附属展示室に現在展示されている、後漢時代の平瓦（06SFX④：3 の注記があるもの）である。平瓦部凹面に布目痕および糸切り痕が明瞭に残るが、枠板痕はない。すなわち、この平瓦は円筒桶で粘土板桶巻作り平瓦（C 型）であることを明瞭に示している。ちなみに、これには、平瓦部広端側凹面に磨点紋の当て具痕が残り、平瓦部広端側凸面に縄叩きによる補足の叩き締めをおこなったことがわかる。

漢代の平瓦については、報告書の図面で平瓦凹面を表示したものがないので、自分の実見した範囲で言うしかないが、陝西省考古研究所調査の西安西渭水橋では、現地に散布する瓦に枠板痕のあるものはみられなかった[8]（1991 年実見）。また、洛陽永寧寺下層と説明された後漢代の平瓦の破片では、枠板痕のあるものはみられなかったが、糸切り痕のあるものが認められた[9]（1995 年実見）。

以上からすると、前漢初頭には「桶巻作り」の平瓦が出現しているが、前漢・後漢を通じて円筒桶（非開閉式）のようである。前漢代は円筒桶で粘土紐桶巻作り平瓦（B 型）が主体、後漢代は円筒桶で粘土板桶巻作り平瓦（C 型）が主体で、B 型が混在するのではないかと思う。

D　五胡十六国時代併行期段階の平瓦

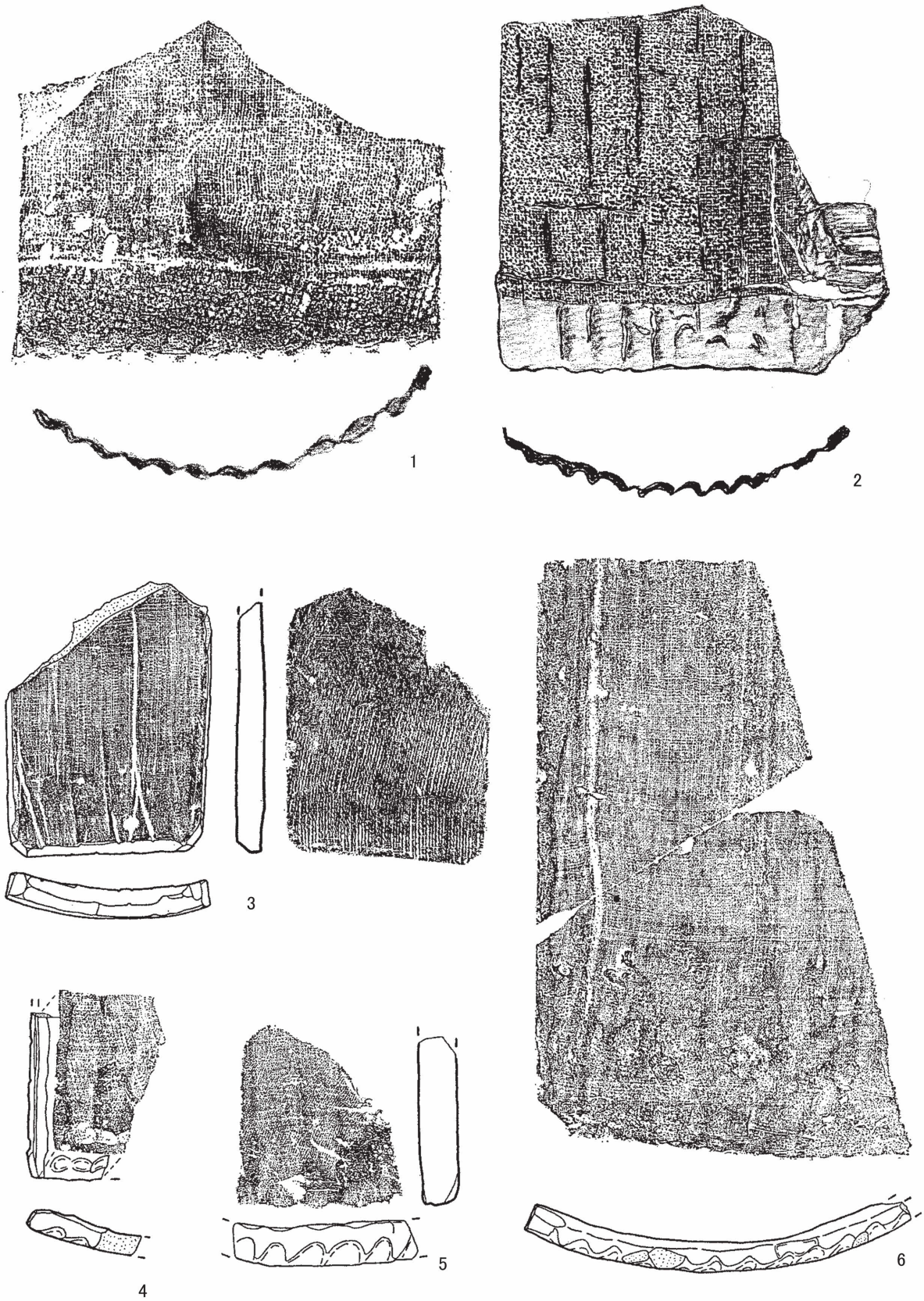
４世紀初めから５世紀中頃にかけての中国北部は、最大 10 にも及ぶ政権が並立する「五胡十六国時代」となるが、これと併行する時期は中国南部の東晋（318～420）前後であり、最近、この時代の瓦が、ほんの少しだが知られるようになってきた。また、朝鮮半島では高句麗初期の瓦や百済漢城時代前半の瓦が、これと年代的に重複する時期にあたる。

（ⅰ）五胡十六国時代の瓦

邯鄲の鄴北城の瓦には草花文軒丸瓦とでも言うべき瓦があって、これと組む軒平瓦[10]は、一重の波状文で、凹面に枠板痕と粘土紐の接合痕を残す（第２図１・２）。模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦（D 型）が、中国北部においては４世紀代に出現していることを示している。

（ⅱ）中国南朝初期の瓦

中国北部の「五胡十六国時代」に併行するのは、中国南朝の東晋（318～420）であるが、この時期の平瓦はまだよくわからない。



第2図　鄴北城と高句麗初期の平瓦（1/4）

1・2　鄴北城　3　太王陵
4・5　千秋塚　6　将軍塚（1・2はスケッチ）

（ⅲ）高句麗初期の瓦

高句麗では、４世紀後半から５世紀初頭頃にかけて、集安地区に太王陵・将軍塚などの王陵級の大型積石塚が築造され、これらの墳墓に瓦が用いられた。谷豊信の「四、五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察」[11]を参考にすると、太王陵は４世紀中頃から後半中葉、千秋塚は４世紀後半から末、将軍塚は５世紀初頭とされ、これらの墳墓で出土する平瓦は、模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦（D 型）であることが明らかである（第２図３～６）。

（ⅳ）百済漢城時代前半の瓦

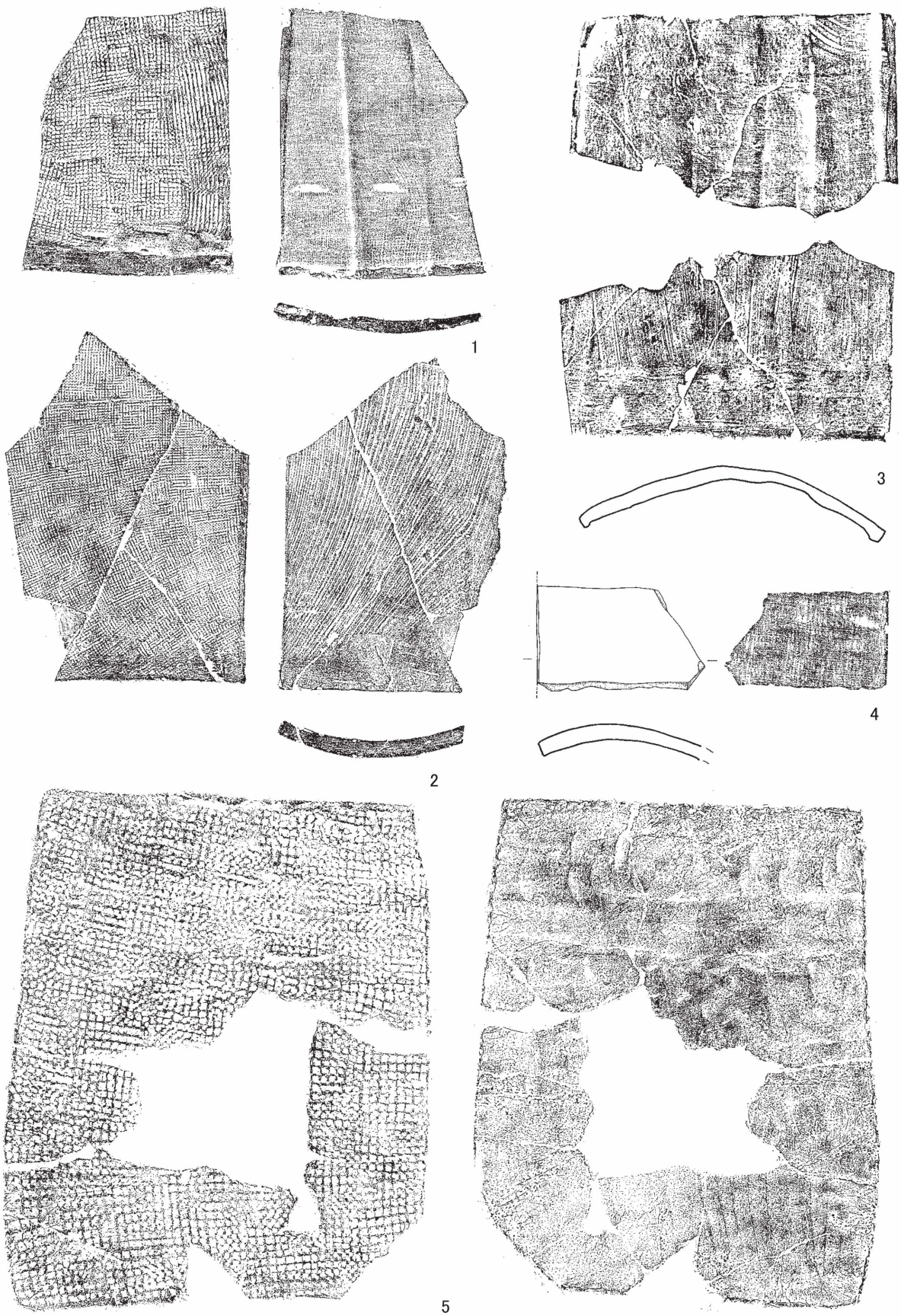
百済の「漢城」は、近肖古王 26 年（371）に都を漢山に移すとあるから、これ以降を百済漢城時代と考える。475 年には高句麗により「漢城」が落とされ、百済は熊津へ遷都するので、この間の百余年を半分に割って、371 年から 420 年までを漢城時代前半、420 年代から 475 年までを後半とすると、これまで知られている漢城時代の瓦は、ほとんどが前半代に属すると考えられている。

その実例として、石村洞四号墳の瓦、夢村土城の瓦、そして『風納土城報告Ⅰ』の瓦について述べよう。亀田修一は、石村洞四号墳の瓦は「四世紀後半～五世紀初めごろ」、夢村土城の瓦は「四世紀末ごろから五世紀前半代」と把握しており[12]、これらは大きくは百済漢城時代前半期の瓦となる。

まず石村洞四号墳の平瓦は、すべて模骨桶で粘土紐桶巻作り（D 型）であり、夢村土城の瓦では模骨桶で粘土紐桶巻作り（D 型）が多いが、平瓦部凹面に無文当て具痕を有し、平瓦部凸面に格子叩目痕を残す泥条盤築による平瓦（A 型）も若干存在する。

一方、『風納土城報告Ⅰ』[13]での平瓦は、模骨桶で粘土紐桶巻作り（D 型）の瓦が最も多く、泥条盤築による平瓦（A 型）も若干存在するが（p.194、p.424）、数は少ない。ソウル・中部圏文化遺産調査団での風納土城発掘品（韓神大学校保管例）では、平瓦部凸面に格子叩き文や平行叩き文を有するものなど、泥条盤築平瓦（A 型）の種類と数が比較的多い。そして、『風納土城報告Ⅰ』では、円筒桶で粘土紐桶巻作り平瓦（B 型、凸面タテナデ）が１例図示されており（p.336）、同様の資料には韓神大学校保管例、古成里土城出土の平瓦がある。また円筒桶で粘土板桶巻作り平瓦（C 型）は、ソウル・中部圏文化遺産調査団報告『風納土城』[14]に図示されており、D 型が風納土城で多いのは先述した通りである。模骨桶で粘土板桶巻作り平瓦（E 型）は『風納土城報告Ⅰ』で３点図示されており（p.173 の２点、p.430 の１点）、韓神大学校保管例にも存在する（以上、第３図１～５参照）。

以上、百済漢城時代の平瓦をまとめると、模骨桶で粘土紐桶巻作り（D 型）の瓦が最も多く、泥条盤築による平瓦（A 型）も比較的多く存在する。これらは百済漢城時代前半の平瓦と考えられる。一方、風納土城全体の瓦としては、B 型・C 型・E 型の瓦もあり、百済扶余時代の平瓦（E 型）、新羅の平瓦（C 型）の祖型がすでに存在することは注目してよい。これらが、どのような年代的位置を占めるのか、検討が必要である。



第3図　風納土城の平瓦（1/5）

1・3・4　国立文化財研究所（註13）　2・5　韓神大学校博物館（註14）
1：D型、2：C型、3：E型、4：B型、5：A型

E　中国南北朝および朝鮮三国時代さらに隋・唐の平瓦

（ⅰ）中国北朝の瓦

大同市の平城明堂（491 年造営）や操場城、そして方山思遠寺などの平瓦は、凹面および側面をミガキ調整するため、第１次成形技法が不明なものが多いが、方山思遠寺の波状文軒平瓦[15]では、凹面にミガキがかかるものの、枠板痕や粘土紐の痕跡が残っており（第４図１）、D 型の平瓦であることがわかる。ただし、この時代の北朝の瓦は丹念なミガキ調整をするのが一般的で、東魏・北斉の鄴城の瓦、洛陽永寧寺の瓦など、凹面の調整はきわめて入念であり、模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦（D 型）の痕跡を残すものはほとんどない。しかし、この時代の中国北朝の平瓦が D 型の平瓦であることは、ほぼ間違いないと言ってよいだろう。

（ⅱ）中国南朝の瓦

南京で実見できた平瓦の数はきわめて少ない。南京中山陵園管理局の祭壇跡の平瓦[16]を図示したが、それは枠板痕と糸切り痕を残す、模骨桶で粘土板桶巻作り平瓦（E 型）である（第４図２）。伴出した軒丸瓦からみて、おそらく梁（502～557）の瓦であろう。

一方、劉宋（420～479）および南斉（479～502）の平瓦がどのようなものかは不明である。しかし、南京大学所蔵の平瓦の中に、桶板痕のない糸切り痕と思われる平瓦（C 型か？）があり、郵便局の発掘現場では、粘土紐を巻きつけた桶板痕と思われる平瓦（D 型か？）を実見したので、南朝前半から中頃にかけては多様な平瓦が存在し、最終的には E 型に統一されていくのではないかと思う。

（ⅲ）高句麗の瓦

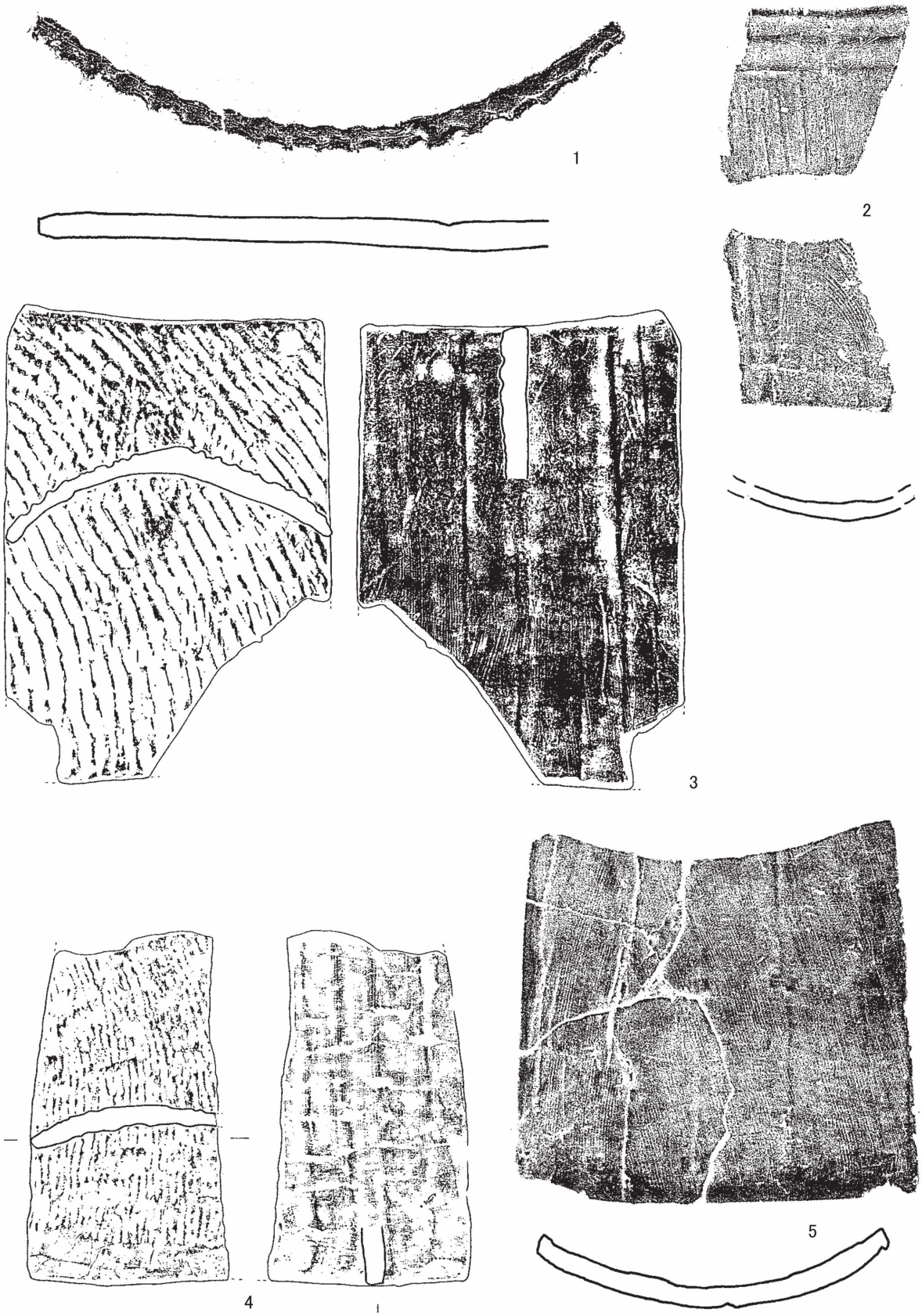
高句麗は長寿王の 15 年（427）に平壌に遷都し、勢力を拡大して全盛期を迎えたが、668 年に唐・新羅連合軍に滅ぼされた。

この平壌における高句麗時代の平瓦は不明と言わざるをえないが、『昭和十三年度古蹟調査報告』の平壌清岩里廃寺[17]や、『昭和十二年度古蹟調査報告』の平安南道平原郡徳山面の元五里廃寺[18]では、５世紀末から６世紀代の軒丸瓦と高麗時代の軒丸瓦が出土している。前者の時代に伴うと考えられる平瓦は、小さな格子叩きを有するものであり、類似の資料を『朝鮮瓦塼図譜 Ⅱ 高句麗』[19]で捜すと、PL.70、PL.71 の平瓦であり、この２例は模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦（D 型）である。高句麗初期と同様に、平壌においても D 型の平瓦が盛行したものと考えられる。

（ⅳ）百済の瓦

475 年の漢城陥落後の百済の王都は熊津（475～538）であり、その後さらに南の泗沘（扶余）に遷都した。

熊津時代 60 余年の公州地方の平瓦については、ほとんどわかっていないのが現状である。平瓦の詳しい報告があるのは、公州の南東 25km に位置する大田月坪洞遺跡[20]であり、凹面



第4図　中国北朝・南朝と百済の平瓦（1/5）

1　方山思遠寺　2　南京中山陵園祭壇跡
3・4　大田月坪洞遺跡　5　益山王宮里

に簾状圧痕をもつ平瓦がよく知られている。この遺跡では、凹面に布目のある通常の平瓦も出土しており、糸切り痕と粘土紐の痕跡のあるものとの両者があるが、枠板の痕跡はすべてに認められる（第４図３・４）。すなわち、大田月坪洞遺跡では、模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦（D型）と、模骨桶で粘土板桶巻作り平瓦（E 型）の両者が併存している。泗沘時代の百済の平瓦がほとんどすべてE型であることを勘案して、公州地方の平瓦を推測してみると、E型を主体とし、若干のD型が存在するのではないかと思う。

一方、扶余地方の泗沘時代の平瓦は、亭岩里瓦窯[21]・弥勒寺・王宮里遺跡（第４図５）など、いずれも模骨桶で粘土板桶巻作り平瓦（E型）である。

（ⅴ）新羅の瓦

新羅地方の平瓦について多くを検討したのは崔兌先[22]であり、多慶瓦窯跡・望星里瓦窯跡・皇龍寺・雁鴨池など、いずれも非開閉式の円筒桶が、古新羅時代にも統一新羅時代にも使用されていたことを明らかにした。崔兌先は、粘土素材では粘土板について説明しているが、私が新羅での皇龍寺などの平瓦を観察した限りでは、やはり布目痕があるものは、すべて糸切りによる粘土素材と考えてよいと思う。すなわち、慶州地域では古新羅時代も統一新羅時代も、円筒桶で粘土板桶巻作り平瓦（C型）が圧倒的多数を占めていた（第５図５）。

ただし、新羅王京内に位置する慶州仁旺洞556・566番地遺跡[23]では、模骨桶で粘土板桶巻作り平瓦（E 型）が出土しており、その年代は、伴出の軒丸瓦からみて７世紀初頭頃と考えている[24]。このような例外も、慶州では若干存在した。

（ⅵ）隋・唐の瓦

唐長安城の平瓦は、円筒桶で粘土紐桶巻作り平瓦[25]（B型）のようであり（第５図２）、隋唐洛陽城の東城内瓦窯での平瓦は、模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦（D型）である（第５図１）。

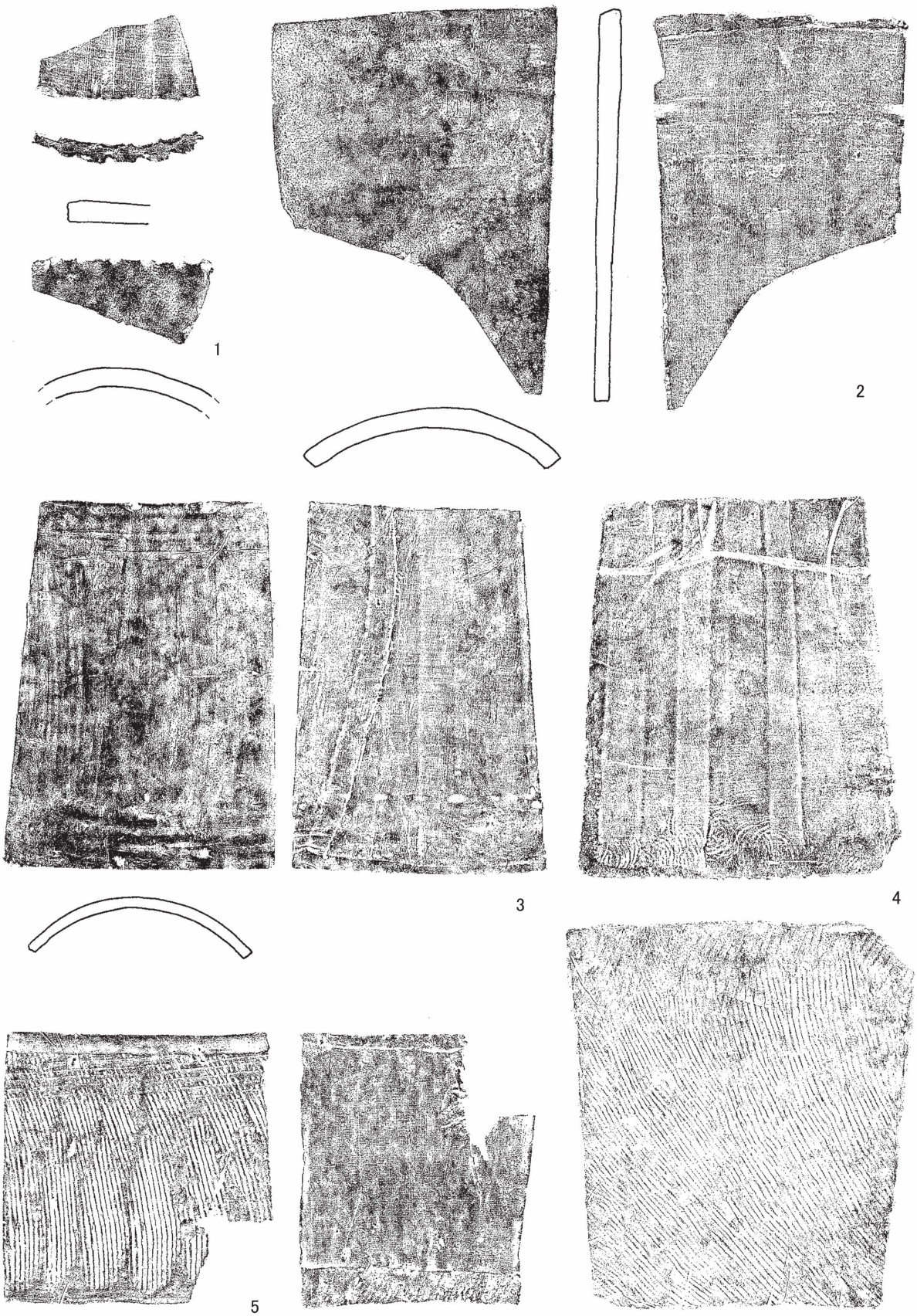
（ⅶ）揚州の瓦

揚州市文物考古研究所で実見した隋唐代揚州城出土の平瓦は、模骨桶で粘土板桶巻作り（E型）であった[26]（第５図３）。これは、南京と揚州との近接した位置関係によるのだろう。

（ⅷ）日本の瓦

588年、百済から瓦博士が渡来して以来、日本の平瓦の製作法は、模骨桶で粘土板桶巻作り（E型）であった（第５図４）。丸瓦を粘土紐で巻き上げる例がごくわずか出現する場合があるが、平瓦を粘土紐で巻き上げる例は、藤原宮段階（７世紀末）まで待たなければ大量に出現しない。それ以前に遡るものとしては、高句麗・北朝の影響を受けた滋賀県の湖東式軒瓦[27]に、模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦（D型）が出現するのみである。

新羅タイプの円筒桶で粘土板桶巻作り平瓦（C型）は、栗原和彦が指摘するように[28]、８世紀末から９世紀前半にかけて九州にあらわれ、10 世紀までは確実に存続する。この C 型の平瓦が７世紀代の日本において全く製作されていないのかどうかは、むつかしい問題を含んでおり、紀伊の上野廃寺にもその可能性がある平瓦が存在するが、側面を調整しているため、一枚



第5図　隋・唐・新羅・日本の平瓦（1/6）

1　隋唐洛陽城東城内瓦窯　2　唐長安城西明寺
3　揚州城　4　飛鳥寺　5　新羅王京

作り平瓦との判別が困難である。また、九州の大野城でもC型の平瓦が存在する可能性はまだ残っている。

F　まとめ

以上をまとめると、平瓦の製作技法の流れは次のようになる。

1　黄河中流域に出現した瓦製作技法は、はじめ泥状盤築技法（A 型）で作られたが、前漢初頭には桶に粘土を巻きつける手法に変わった。

2　前漢・後漢を通じて非開閉式の桶である円筒桶が用いられたようで、粘土板を巻きつけるもの（C 型）は、後漢には確実に出現している。

3　五胡十六国時代およびその併行期には、さまざまな瓦が出現し、交錯したようである。まず、中国北部に模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦（D 型）が 4 世紀代に出現し、洛陽ではC 型の平瓦を駆逐してしまった。このD 型平瓦は、その後、北朝を通じて用いられる技法であり、それは隋唐代にも継続される。

4　中国北朝の D 型の平瓦は、高句麗の D 型平瓦と同じであり、両者の関係は、大きくみると兄弟関係のようなものであったと考えられる。両者の始源相互関係の追究は、今後の課題である。

5　新羅の平瓦は、円筒桶で粘土板桶巻作り平瓦（C 型）であり、公州や扶余の百済瓦とも異なり、D 型の高句麗瓦とも異なる。新羅のC 型平瓦は、百済や高句麗とは全く異なる地域から波及したと考えざるをえない。このC 型の瓦は後漢代の洛陽にあったが、その後、5 世紀前半頃の風納土城に若干あらわれる。おそらく、5 世紀代の南朝の東晋（～420）・宋（420～479）・南斉（479～502）にはこの技法が出現し、梁（502～557）にも若干残存した。この南朝C 型瓦が新羅瓦の祖型であったと考えられる。

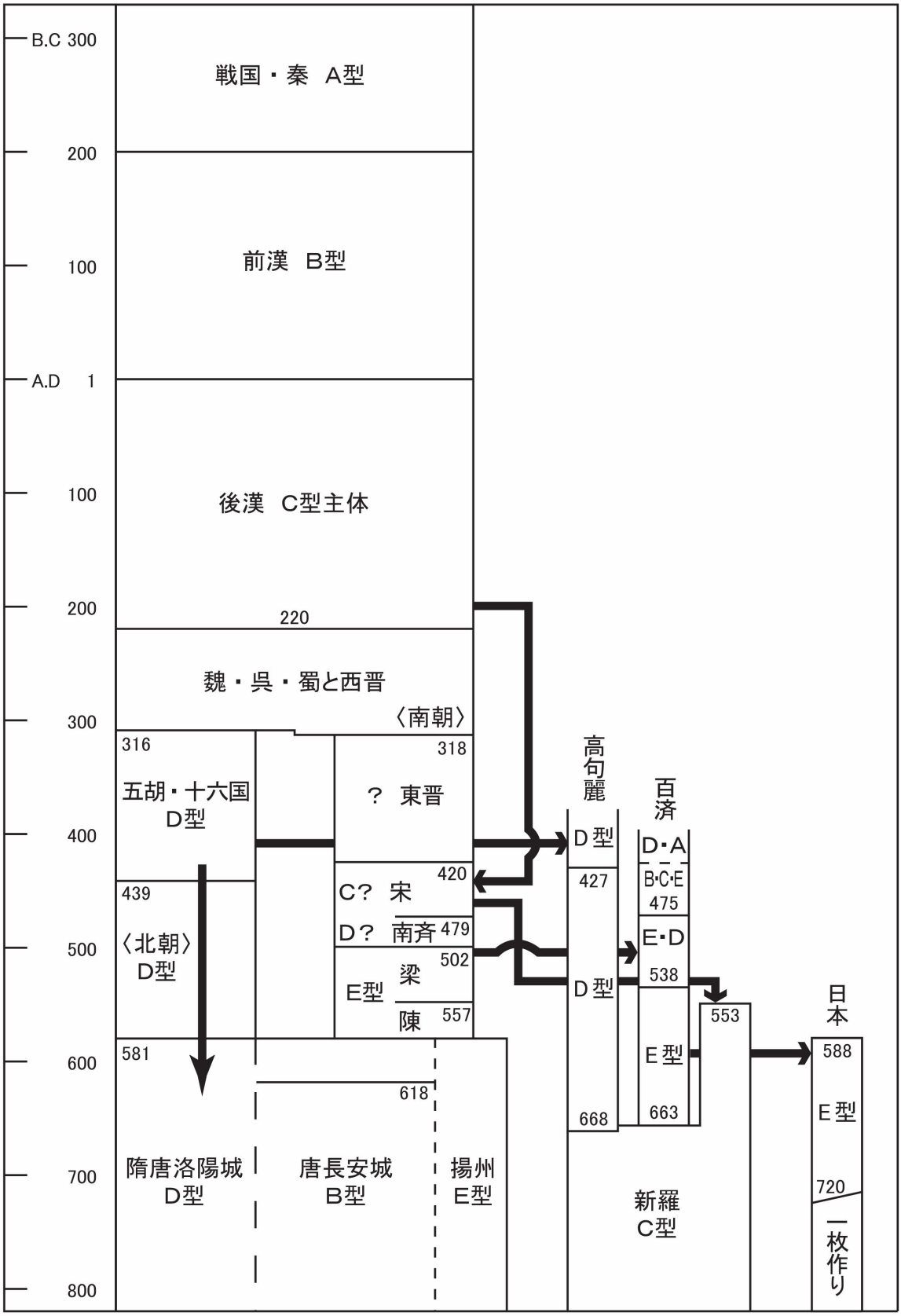
　さらに、南朝でのC 型瓦の出現は、五胡十六国時代におこった漢民族の大量の流民の発生に原因があり、華北から江南へ逃れた者数百万[29]であったという事情が背景にあるのだろう。

6　日本の平瓦は、模骨桶で粘土板桶巻作り平瓦（E 型）であり、百済の扶余地域からの波及であることは、これまで明らかにされている通りである。中国南朝でも、梁（502～557）・陳（557～590）の平瓦製作法は、E 型が主体をなすものと考えられる。この影響は、南京に近接する揚州でもあらわれ、揚州での隋・唐代の平瓦がE 型であることと関連するものだろう。

註

（1）佐原 真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』58 巻 2 号、1972 年。

（2）崔兌先「平瓦製作法의 変遷에 대한 研究」『慶北大学校文学碩士学位論文』1993 年。



第6図 古代東アジアの平瓦製作技法の流れ

（3）佐川正敏「東アジアの軒平瓦の比較研究１―日・中を中心に―」『日本中国考古学会第２回総･大会』資料、1991 年。
（4）大脇 潔「西周と春秋の瓦」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』2002 年。
（5）山崎信二「西安における秦から前漢までの軒丸瓦の変遷」2000 年脱稿（奈良文化財研究所『漢長安城桂宮』2011 年刊行予定）。
（6）中国社会科学院考古研究所櫟陽発掘隊「秦漢櫟陽城遺址的勘探和試掘」『考古学報』1985 年第３期。
（7）中国社会科学院考古研究所『漢杜陵陵園遺址』1993 年。
（8）奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報 1992』1993 年、p.76。
（9）奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報 1995』1996 年、p.7。
(10) 朱岩石・何利群「鄴城遺址出土北朝陶瓦製作工芸研究」『四至十世紀東亜制瓦技術研究』中国社会科学院考古研究所・日本奈良文化財研究所、2008 年。
(11) 谷 豊信「四、五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察―墳墓発見の瓦を中心として―」『東洋文化研究所紀要』第 108 冊、東京大学東洋文化研究所、1989 年。
(12) 亀田修一『日韓古代瓦の研究』2006 年。
(13) 국립문화재연구소『風納土城Ⅰ』2001 年。
(14) 서울・中部圏文化遺産調査団『風納土城』2006 年。
(15) 劉俊喜「北魏平城遺址陶瓦的初歩研究」『四至十世紀東亜制瓦技術研究』中国社会科学院考古研究所・日本奈良文化財研究所、2008 年。
(16) 賀雲翱・王碧順・路侃「南京出土部分南朝磚瓦資料的初歩研究」『四至十世紀東亜制瓦技術研究』中国社会科学院考古研究所・日本奈良文化財研究所、2008 年。
(17) 朝鮮古蹟研究会『昭和十三年度古蹟調査報告』1940 年。
(18) 朝鮮古蹟研究会『昭和十二年度古蹟調査報告』1938 年。
(19) 井内古文化研究室『朝鮮瓦塼図譜 Ⅱ 高句麗』1976 年。
(20) 국립공주박물관・충남대학교박물관・대전광역시 상수도사업본부『大田月坪洞遺跡』1999 年。
(21) 国立扶余博物館『扶餘亭岩里가마터（Ⅰ）』1988 年。国立扶余博物館・扶餘郡『부여정암리가마터（Ⅱ）』1992 年。
(22) 崔兌先「平瓦製作法의 変遷에 대한 研究」前掲註２。
(23) 国立慶州文化財研究所『慶州仁旺洞 556・566 番地遺蹟発掘調査報告書』2003 年。
(24) 山崎信二「七世紀後半の瓦からみた朝鮮三国と日本との関係」『日韓文化財論集 Ⅰ』奈良文化財研究所・大韓民国国立文化財研究所、2008 年。
(25) 佐川正敏「中国の軒平瓦の成形・施文技法を考える―東アジアの造瓦技術の比較研究Ⅰ―」『日本中国考古学会会報』第２号、1992 年。
(26) 李久海・劉涛・王小迎「揚州城遺址新出土瓦当概述」『四至十世紀東亜制瓦技術研究』中国社会科学院考古研究所・日本奈良文化財研究所、2008 年。
(27) 山崎信二「七世紀後半の瓦からみた朝鮮三国と日本との関係」前掲註 24。
(28) 栗原和彦「太宰府史跡出土の軒平瓦」『九州歴史資料館研究論集』25、2000 年。
(29) 三崎良章『五胡十六国』東方選書 36、2002 年。